晩冬

肩をすぼめ、痛いほどの冷気に
春への憧れを指してこの街を
ああ、雅歌の流れる時ぞ近し

ゆらゆらと舞い落ちるは祝福の如く
思わずも見上げる教会の尖塔に
ああ、陽光（ひかり）と温もりの時ぞ近し

灰色にうち沈む港の彼方、雲と海
音のことごとくを吸い取る曇天の下
ああ、橋くぐり抜けて漕ぎ出す日ぞ近し

急きたてる者はひとりもなく
ただ微笑をもってその到来を信じ
ああ、色とりどりの花摘む日ぞ近し

毛皮に包（くる）まり、雪に足をとられつつ
春への憧れを指してこの街を
ああ、清々しい微風に身を任す日ぞ近し

(1985.2.1)